

金剛山百合 俗に爲朝百合といへり、白地に赤鹿の子の點入也、開花六月中旬、河州金剛山に生

ず、他所に下種分株しても、決して育つことなし、此花を陰干にしてあぶらに浸しおき、疵に附るに、其功いたつて妙なりとぞ、

〔剪花翁傳〕七月開花、鹿の子百合 花淡赤く濃赤の點斑入なり、開花七月下旬、花中形也、

〔剪花翁傳〕八月開花、秋透百合 花並百合と同じ、開花八月下旬より十月中あり、

〔甲子夜話〕七十、蝦夷草紙ト云ヘル書ニ、最上徳 彼地ノ産物ヲ擧ゲシ中ニ、黑花ノ百合、アツケシ地名

邊ヨリ奥處々ニアリト、コレ深紫ノ色ナルベシ、珍シ、林子曰、今ハ珍シカラズト、然レバ他ニ移栽ノ者アルカ、予浦清ハ未見、

百合栽培
〔農業全書〕四、百合

藥種にも用る物なり、本草を考ふるに、花白きを用ゆと見えたり、今世に關東より薩摩ゆりなど云類なり、又一種莖高くして、葉の間に黒き子を生じ、五六月紅黃花を開く、花の上に黒胡麻をまきたるごとき黒點あり、是卷丹なり、子を土に埋み置て、零餘子のごとく春植べし、居家必用云、行をなして植へ、科ごとこゑを置、水をそぐべし、間五寸許にし、後まげくば別のうねに移すべし、三年の後大さ盃の如し、年々次第して植べし、よくわきの草を去べし、本草に百合新なるはむして食し、肉に和して又よし、乾きたるは粉にして餅となして食す、人に益あり、ゆりの根を取用るには、外よりかき取て、下の方を三ヶ一も取殘して、それを植へこやし養へば、次の年は又大かた前のごとくなるなり、生る物を皆殺さず、毎々加様に心を殘すは、仁愛の物に及ぶ心なり、又子を年々植置ば、いか程も多くなる物なり、又ゆりの根を鹽湯にてゆびき、菓子に用ひてよし、吸物にしめ物、かれ是料理おほし、百合は子をうへ根をそだて、年々にこやして作れば、殊外多くなる物なり、右に記すごとく、かれこれ料理によく、其性もよき物にて、ことに作でま入す、其花も暑月